

愛鳥の心が育てるよい環境⑤

(日本鳥類保護連盟募集第一席入選愛鳥標語)

トリは環境のバロメーター

自然の環境がこわされると、その影響を受けていろんな生物にさきがけてすぐに姿を消してしまうことがあります。ヒトの目には、環境のどこがわかるようになったかわからない程度の変化でも、早々と姿を消すトリたち——自分のすみかの環境を選ぶことがあまり上手でない、それだけに自然の破壊に敏感だということになりますが——は、その環境がよい状態かわい状態かのバロメーターになります。つまり、野鳥が少なくなり、いなくなることは、次はヒトがおかされるということを身をもって警告してくれるわけで、鳥類保護が、私たちヒト自身をまもるためのアロー・ヘッド(Arrow-head・矢の徳先)と呼ばれているのはそのためなのです。

トリの生命を護ることはヒト自身を護ること

こういう、動物と自然環境の破壊の状態や関係を調査して、ヒトの生活の役に立てようとするのを生態学(Eコロジー)といいますが、むずかしい講義はさておいて、右の図をご覧ください。これは、動物研究家の柴田敏隆さんが、ご自分の住んでいる三浦半島での10年以上にわたる観察資料から、野鳥を環境のバロメーターとして、ヒトの生活環境を5段階にわけて評価したものです。もちろんこの調査は、地域によって違ってくるとはいいうものの、ヒトとトリとの関係、自然と動物との間に、重大な問題がおこりつつあることに気がつかると思います。私たちはこの愛鳥キャンペーンを通じて、たくさんのトリたちが住める環境をつくることが、そのままヒトの安全な生活環境づくりにつながることから、トリを愛し、保護していく段階で、まずヒトの心の中にトリの保護区を持とう>と提唱するものです。



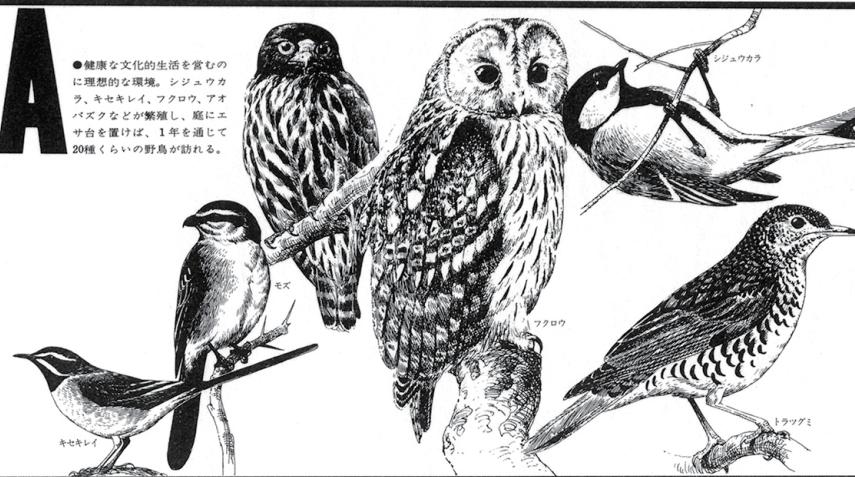
ヒトの心の中に「トリの保護区」を

財團法人
日本鳥類保護連盟
サンタリー株式会社

●この広告は、財團法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サンタリー株式会社がシリーズとして制作したもの。

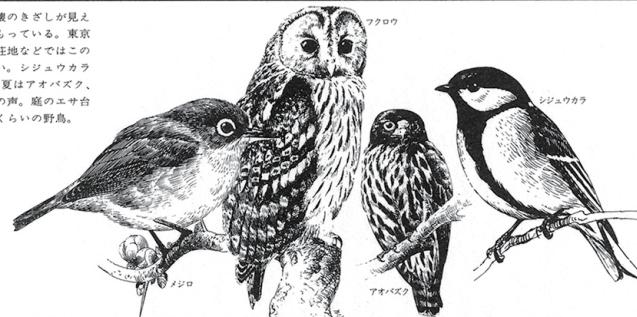
A

●健康な文化生活を営むのに理想的な環境。シジュウカラ、キセキレイ、フクロウ、オオバズクなどが繁殖し、1年を通じてサ台を置けば、20種くらいの野鳥が訪れる。



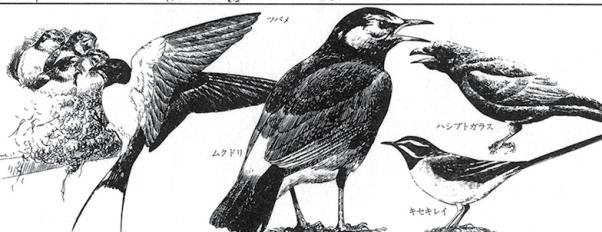
B

●やや自然破壊のきしが見えが回復力をもっている。東京近郊の分離別荘地などではこの程度以下が多い。シジュウカラが毎日見られ、夏はオオバズク、冬はフクロウの声。庭の木やサ台には年間10種くらいの野鳥。



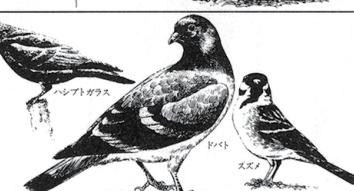
C

●現在の大都市周辺のベッドタウンの環境。キセキレイ、ツバメ、ムクドリ、カラスくらいしかない。カラスの声は毎朝よく聞く。



D

●交通、騒音などが多く、ヒトはいつも大きな精神的緊張をともなう生活の連続を強いられている。スズメ、ドバトがいて、ときどきカラスの声を聞く。



E

●公害など、ヒトをもしばむ環境。ときどき、ドバトが空を通過するだけ……。



静けさか、それとも
トリたちの△沈黙△が意味するもの

5